



平成21年8月3日  
卓話『歌舞伎よもやま話』  
歌舞伎俳優  
中村 梅玉 様

歌舞伎は江戸時代に生まれた庶民のための娯楽ですから、堅苦しい雰囲気はないはずなんですけども、いつの時からかすごく難しい、言ってることもなんだか分かんないという方が多くなったように思います。明治の時代に9代目の市川団十郎さん、5代目の尾上菊五郎さんが歌舞伎を芸術に高めようという運動を起こされ、今、歌舞伎は芸術だと言われるようになったのはありがたいけれども、骨董品のように思われてしまうのはやっぱりいけないことだと思います。

歌舞伎はものすごい多様性のあるもので、能や狂言から取り入れたり、人形浄瑠璃であったものを移した作品も沢山あります。その時代、時代でいろんなものを吸収してきたわけですから、21世紀には21世紀なりの歌舞伎は必要だと思うんです。でもなんでも新しければいいというわけではなくて、やっぱり歌舞伎の基本の古典の芸を身に付けた人がやらないと、どうしても上滑りしていくような気がいたします。

役者の家に生まれた男の子は5歳ぐらいになると日本舞踊の稽古を始めて、大体6歳ぐらいで初舞台に立ちます。子供の時に、わけが分かんなくても舞台に立って先輩たちと一緒に動き回る、そういう経験が役者の力になっていくように思うんです。それが二十歳前後になると声変わりもあり、背格好も中途半端でなかなか役が付かなくなります。その時、役者なんかやだ、他の道へ進みたいと悩む人も多いです。それを辛抱して地道に稽古を続けていくと、20代になったところに周りの方からも注目され、いい役も付くようになって

舞台に立つのが楽しみになる。その後また、ある程度の役が与えられる時になると今度は先輩から、目立つ役をやっているのにあんな出来じゃだめだといって叩かれます。それでまた発奮して一所懸命に稽古をして力を付けていく、歌舞伎役者の一生にはそういったチェックポイントがあるんですね。それが襲名だと思います。私の場合は21の時に福助を、41の時に梅玉を襲名いたしました。襲名は名前が上がるだけではなく、役者の実力が上がっていかなければ意味がないわけで、そういうことも大切なだと思います。

我々60を越して一人前といわれる立場になった者として、今度は歌舞伎を後世に伝えていくのが役目だと思っております。そこで子供たちに歌舞伎を始めとして日本の伝統文化のよさを伝えたいと、7年前から夏休みに小学生のための歌舞伎体験教室を開催しております。小学校高学年の子たちにお稽古をして衣装を着て、我々がやる通りのことを1週間でやってもらうわけです。最初はいいやいや来ていた子も稽古を重ねていくごとにすごく乗ってきて、最終発表の時は皆さん目を輝かして舞台をふんでいらっしゃる。そういうわけで歌舞伎をもっともっと日本の若い皆さんに見ていただくように、これからも努力して毎日の舞台を務めていきたいと思っております。

